

サステイナブルな心性・行動尺度の再検討

堀毛 一也 (Horike Kazuya: 東洋大学・社会学部)。

キーワード: サステイナビリティ、向環境的態度、主観的 well-being

【問題】

最近心理学分野でも、サステイナビリティ (持続可能性) への関心が高まりつつある。たとえば、2013 年に開催された国際ポジティブ心理学会でも、メインテーマのひとつとして、「ポジティブな環境、サステイナビリティ、保護」が掲げられ、活発な論議が行われた。筆者は、科研費の助成を受け、2010 年からポジティブ心理学を背景としたサステイナブルな心性の発見、行動の促進を目的とした研究を続けてきた (堀毛,2011,2012,2013)。その中で、サステイナブル心性尺度、サステイナブル行動尺度を開発してきたが、最近の研究成果が取り込まれておらず、抽出された因子に概念的不足が感じられること、また構造的安定性に乏しいことなどの問題が生じてきた。そこで、本来の目的である行動促進のための介入研究のツールとして尺度内容を再吟味し、向環境的態度などとの概念的関連性・弁別性を確認するための質問紙調査を行った。

【方法】

調査日時は、平成 25 年 2 月。これまで調査を行ってきたサンプルとの等質性を保証するため、前 2 回の調査と同様、東北地方の国立大学生 101 名 (男性 54 名、女性 47 名) を対象とした質問紙調査を行うと共に、父母に回答を依頼し、143 名 (父親 67 名、母親 76 名、回収率 71%) から回答を得た。質問紙には 13 の尺度が含まれていたが、今回の分析には以下の 5 つの尺度を使用した。1) 改訂版サステイナブル心性尺度 (40 項目)、2) 改訂版サステイナブル行動尺度 (42 項目)、3) 改訂版向環境的態度尺度 (Milfont,2010)、4) 環境問題評価尺度 (佐古他, 2002)、5) 主観的幸福感尺度 (Lyubomirsky, et al., 2002; 島井他, 2005)。このうち 3) については、オリジナルな尺度の 12 因子から、3 項目づつを選択し 36 項目の尺度として実施した。また 4) に関しては、28 の環境問題から対象者や地域の特性を考え 15 の項目を選択し、EAI-J の 9 つの評定尺度のうち、「環境全体にとってどの程度深刻か」、「将来の科学技術によって解決できるか」という 2 つの尺度のみに回答を求めた。また 5) に関しては、これまでの調査結果をもとに 4 項目のうち 3 項目のみに回答を求めた。評定はいずれも 7 段階とした。

【結果と考察】

1) ~ 4) の尺度について、最尤法プロマックス回転により因子分析を行った。(1) サステイナブル心性尺度については、世代継承性など 9 因子が抽出された (表 1 参照)。

(2) サステイナブル行動尺度については 12 因子が抽出され、マイ資源節約行動、環境関心活動、日常エコ活動、一般的環境配慮行動、もったいない意識、節電配慮行動、クリーンエネ活動、リサイクル活動、職場エコ活動、家庭資源節約活動、一般資源節約活動、オーガニック生産物への関心、と命名した。(3) 向環境態度尺度については、ほぼオリジナルな尺度と一致する 9 因子が (表 1 参照)、(4) 環境問題評価尺度については、環境汚染、地球環境破壊、災害異常気象、人口問題の 4 因子が抽出された。

それぞれの下位尺度得点を求め、下位尺度間の相関を検討した。サステイナブル心性尺度と向環境態度尺度間には、-.35~.50 の相関がみられた。表 1 には、両尺度の 2 次因子分析結果を示す。心性尺度と向環境態度尺度はほぼ独立な因子を構成しており、心性尺度の弁別的妥当性が確認された。心性尺度と行動尺度間には、-.01~.40 の相関があり、相互に独立で、かつ下位尺度ごとに関連の様相が異なることが示された。心性と環境問題の深刻さ評価には-.03~.34 の相関があり、36 の下位尺度の組み合わせ中 30 が有意な関連を示したが、科学による解決評価との相関は 6 つしか有意な相関を示さなかった。また、主観的幸福感尺度との相関はいずれも低かった。これらの結果はサステイナブル心性・行動尺度の妥当性を示しており、今後サステイナブル行動の促進介入に有効なツールとなり得るものと考えられる。

表 1 : 心性尺度と向環境態度尺度の 2 次因子分析結果

	因子				
	1	2	3	4	5
世代継承性	.622	.207	.151	.076	-.312
持続的環境への関心	.361	.015	.556	-.068	.070
生物多様性への関心	.535	.206	-.047	-.098	-.026
判断の公正性	.839	-.054	-.137	.012	.197
環境親和感	.253	.649	-.094	.020	.041
問題解決への関心	.663	.031	.133	-.027	.229
否定的態度	-.103	.072	.158	-.377	-.095
サステイナブル WB	-.016	-.115	.843	.002	-.009
社会的多様性への関	.738	.065	.011	.159	-.157
自然親和感	.057	.618	-.058	-.079	-.162
環境保護活動	.123	.650	-.158	.123	.129
人間中心環境利用	.153	.141	-.049	.549	.050
環境保護信念	.242	-.265	.162	.375	.087
科学信奉性	.157	.244	-.003	-.138	.203
個人消費抑制	-.188	.610	.378	.023	.081
人間優位性	-.291	.101	.062	.776	.064
自然資源利用	-.062	.273	.175	-.204	.099
人口抑制	.041	.048	.029	.149	.568

【謝辞】本研究の遂行にあたっては科研費 (基盤研究 (C) : 課題番号 22530668 研究代表者堀毛一也) の助成を受けた。協力いただいた岩手大学の学生諸氏、ご父兄ならびに川原正広氏 (岩手大学非常勤講師) に厚く御礼申し上げます。